

博士學位論文審査結果の概要

ふりがな 氏 名 学位の種類 学位記番号 学位授与年月日 学位論文題目 審査委員	かさい きょうこ 笠井 恭子 博士（看護学） 博第 16 号 平成 29 年 3 月 18 日 1 年間の追跡調査による特別養護老人ホーム入居者の夜間睡眠の 特徴と関連要因 主査 石川県立看護大学 教授 丸 岡 直 子 副査 石川県立看護大学 教授 長谷川 昇 副査 石川県立看護大学 教授 濱 耕 子 副査 石川県立看護大学 教授 川 島 和 代
審査結果の概要	
<p>この研究論文は、施設に入居する要介護高齢者の夜間睡眠の特徴と関連要因を明らかにしようとするものであり、マット型睡眠計を用いて得られた特別養護老人ホーム（以下、特養）入居中の要介護高齢者の睡眠データと日常生活に関する情報を 1 年間追跡調査し分析した研究結果を示すものである。</p> <p>特養入居高齢者のうち、日中離床している要介護高齢者（介護度 1 ～ 3）のベッドマットレスの下にマット型睡眠計（スリープスキャン SL-511）を常時設置し、夕方から 15 時間の終夜睡眠を 1 年間にわたり記録した。1 年分の睡眠データの分析には、独自に開発した睡眠データを可視化できるソフトウェアを用いている。分析可能な要介護高齢者 15 名の 1 年間の睡眠データ（入眠時刻、起床時刻、睡眠時間、覚醒時間、レム睡眠時間、浅睡眠時間、深睡眠時間）を夜間睡眠に影響するアクティビティ（入浴、外出、面会）、季節および夜間の排泄状況から分析した。その結果、特養入居中の要介護高齢者の夜間睡眠には季節差があること、在宅高齢者に比べて入眠時刻が早く睡眠時間は長いこと、夜間の睡眠構造ではアクティビティおよび排泄行動の自立度による違いはないことを明らかにしている。さらに、レム睡眠割合と中途覚醒割合に着目し、1 年間の連続した睡眠データから、「レム睡眠が多く中途覚醒が少ない」パターンと「レム睡眠が少なく中途覚醒が多い」パターンの 2 つの典型的なパターンを明らかにしている。このような長期追跡データから要介護高齢者の睡眠パターンの特徴を見出し、可視化したことは新たな知見であり、ケア方法を提案していく上で重要な根拠となり得る。また、1 年間という連続した睡眠データと日常生活に関する情報の収集と分析ソフトウェアを独自に開発したことは独創性がみられる。研究の一部はすでに学術雑誌に「要介護高齢者の睡眠状態と睡眠の季節差—北陸地方の特別養護老人ホームにおける長期追跡調査から」（筆頭著者：笠井恭子）、「特別養護老人ホーム入居者の夜間の排泄ケアと睡眠状態との関連」（筆頭著者：笠井恭子）の 2 編が原著論文として掲載されている。</p> <p>審査においては、要介護高齢者の睡眠問題の説明の追加、睡眠の生理的・社会心理的側面からの概説の追加、睡眠パターン分類方法の説明および睡眠パターンごとの睡眠構造の追加等の指摘があり、これらをクリアする修正を行って論文を完成させた。この修正過程において、研究結果を俯瞰して論旨を組み立てる視点を再確認でき、研究能力を高めたものと考えられる。</p> <p>本研究は、要介護高齢者が増加する中で、施設入居高齢者の睡眠研究の基盤となることが期待されるとともに、睡眠状態を可視化したことにより新たな睡眠援助方法の提案や開発に寄与すると考える。</p> <p>以上から、審査員 4 名全員が博士學位論文審査及び最終試験合格と判断した。</p>	

